

横浜

Yokohama Renaissance

# 横浜 ルネサンス



Number 13

特集

ヨコハマを録る

Who's Who in YOKOHAMA

影山摩子弥さん

KAZUHOさん



横浜信用金庫

## ごあいさつ

横浜信用金庫理事長

斎藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第13号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行となっています。

本号では、特集「ヨコハマを録る」と題して、横浜の魅力をさまざまな形で採取して、伝え記録するという活動を展開する方々を取りました。登場していただいた方たちのメディアとの関わり方を通じて、今年、開港150周年を迎えた横浜を過去から未来に向かう視点で捉えました。

Who's Who in YOKOHAMAでは、1人目に社会貢献に取り組む横浜の中小企業を応援する、横浜市立大学の影山摩子弥教授をご紹介しました。中小企業専門金融機関である当金庫にとっても中小企業の社会貢献活動は重要なテーマです。2人目は、当金庫が開港150周年記念事業として1月3日(土)に実施したイベント「ジェリービーンズコンサート in 赤レンガ倉庫」で、卓抜したパフォーマンスを披露してくれたジャグラーKAZUHOさんにご登場いただきました。

第6回「横浜の聴き方」では、「本牧メルヘン」を取り上げています。ややマイナーな曲ですが、作詞の故・阿久悠さんが公式ホームページで「知る人ぞ知る名曲」と述べている曲です。

また、街角情報として、当金庫が特別協賛している「横浜国際ユース友好交流合唱フェスティバル」のご案内をしています。

『横浜ルネサンス』第13号、お楽しみいただければ幸いです。

表紙撮影：矢部志保

## A Table of Contents

横浜絵解き図鑑／カミソリの輸入	2
目次／理事長挨拶	3

### 特集 ヨコハマを録る

北島美穂 フリーアナウンサー	4
横浜の魅力を伝え続けてきた、FMヨコハマ随一の長寿生ワイド番組	

森直実 アーティスト	6
街が劇場となる大道芸を撮り続け、おのずと横浜のドキュメントに	

黒野哲也 デジタル・アーキビスト	8
街の記憶をデジタルアーカイブして過去と未来の仲立ちを目指す	

斎藤多喜夫 元横浜開港資料館調査研究員	10
文献には残らない出来事を後世に伝える、写真史料	

橋本康二 市民放送局プロデューサー	12
街で、市場で、開港博で、市民がハマの暮らしを放送記録する	

横浜を詠む 水原紫苑 写真：矢部志保	14
街角情報 横浜国際ユース友好交流合唱フェスティバル	16

### Who's Who in YOKOHAMA

影山摩子弥 横浜市立大学教授	18
社会貢献に取り組む横浜の中小企業の応援団	

KAZUHO ジャグラー	20
画期的な技と斬新な芸を見せる、ジャグリング界のスター	

横浜の聴き方 第6回 中島久	22
「本牧メルヘン」鹿内孝	

横浜ジェリービーンズ俱楽部通信	23
-----------------	----

### ◎横浜絵解き図鑑

## カミソリの輸入

カミソリの輸入数量が伸びている。2008年の全国におけるカミソリの輸入実績は、数量が2億7,348万個（対前年比4.7%増）で、2005年に次ぐ2番目の記録となった。また、横浜港においても、2008年の輸入数量は8,642万個と対前年比5.3%増となった。

かつては一枚刃だったカミソリも、いつの間にか二枚刃三枚刃と増えていき、今ではなんと五枚刃というものまで登場した。しかも、この五枚刃には「ピンポイントトリマー」という刃がついているから実質は六枚刃ということになる。それが輸入数量増加の原因か……。

実は、カミソリの輸入統計は個数でのカウント。刃の枚数を反映しているわけではない。横浜税関の資料によれば、カミソリの輸入が増えている理由は2つ。

ひとつは、替え刃式のカミソリは、機能が向上した新商品の発売やテレビコマーシャルなどの効果により販売数量が増加していること。

2つ目の理由は、旅館やホテルで使用される使い捨てのカミソリの中華からの輸入が増加していること。

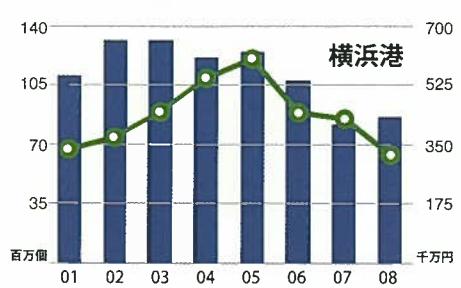
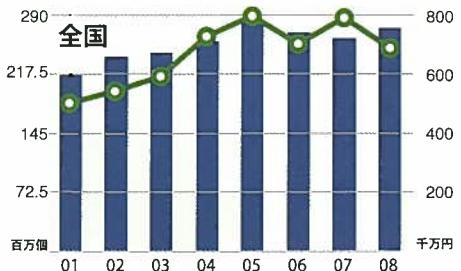
以上を背景に、今後も増加基調で推移するものと予測している。

ちなみに、2008年において、横浜港は輸入数量及び輸入金額ともに第1位のシェアを占めている。また、東京港を含めた2港でみると輸入数量の約6割のシェアを占めているが、これは、人口の多い大都市圏での消費量が多いことや大手カミソリメーカーの倉庫が横浜港及び東京港周辺にあることが要因となっている。

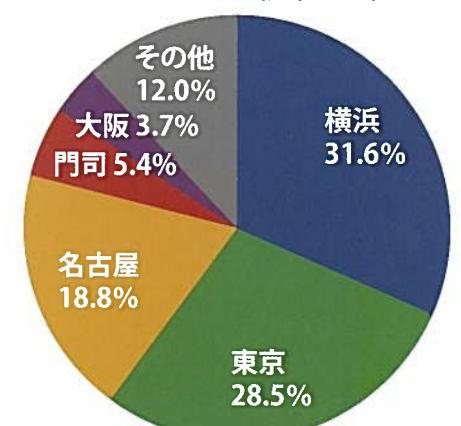
さて、増え続けるカミソリの刃数だが、その理由は、刃の枚数が増えると深剃りができるの

で何度も繰り返して剃る必要がなくなること。まず1枚目の刃が最初のヒゲを剃る。その後

ヘッドが進行方向に肌を押すことで、最初に剃られたヒゲの根本の部分が表皮上に引き出される。引き出されたヒゲ



## 港別輸入実績(2008)



は、再び毛穴に戻る前に2枚目の刃によりカット。さらに3枚目、4枚目、5枚目が、同じように残ったヒゲを剃っていくことで、一度で剃れる量が多くなる。さらには、深剃りできるのに刃1枚にかかる力が分散されるので当たりがソフトになるとか。

カミソリの世界も奥が深いようだ。

横浜税関 調査部 調査統計課資料より作成

# FMヨコハマ随一の長寿生ワイド番組 横浜の魅力を伝え続けてきた、 FMヨコハマ随一の長寿生ワイド番組

Photo by Yabe Shiro



きたじまみほ  
徳島県生まれ。国際基督教大学卒業。  
92年に中京テレビ放送にアナウンサーとして入社。退社後、NHK徳島の契約アナウンサーとして活動を開始。現在、NHK教育「高校講座家庭総合」、FMヨコハマ「THE BREEZE」に出演中。6月は横浜開港150周年にちなんでスペシャルな内容でお送りします。

## 時代の流れに沿い、変化を続けてきた

毎週月曜から金曜まで、横浜の持つレトロで新しい感覚を「情報と音楽のそよ風(ブリーズ)」として届けるFMヨコハマの『THE BREEZE(ザ・ブリーズ)』。1996年以来、今も続く长寿番組だ。2000年4月からこの番組のパーソナリティを務める北島美穂さんに「長寿の秘訣」を聞いてみた。

「時代の流れに敏感に、内容を少しずつリニューアルしながら現在に至っているんです。たとえば、以前から続いているコーナーも、BGMを変えると雰囲気が一新します。また、映画の紹介をする際に切り口次第で新鮮になりますね」

だが、「久しぶりにエフヨコつけたら変わつてなくてうれしかった」といった声がリスナーから届くこともあるという。「それは、変革できていないという意味とは受け取っていません。数年間の転勤を経て横浜に戻ってきた人が、私の声がラジオから聞こえてほつとしたといふ『ただいまメール』を頂くこともありますからね。短期間で変わる番組が多い中、必要な微調整をしながら今後も続けたい。よく冗談で『赤いちゃんちゃんこを着るまで続けたい』っていうんですよ」

## ラジオというメディア環境も変化した

毎日、朝9時から午後1時までの生放送。この長丁場を北島さんは一人でスタジオで過ごす。大きな窓からは日本丸を見下ろせ、汽車道を一望できる。「高いビルが増えて、この10年で窓からの眺めも変わりましたね。それから、一日の時間の流れも窓からわかります。たとえば祝日の午前中は、桜木町方面から家族連れが繰り出す姿が見られます。そしてお昼近くになると、芝生の上でお弁当を広げる人たちが増えています。スタジオから双眼鏡で覗くと、おにぎりの具もわかるほどなんですよ(笑)」

『ザ・ブリーズ』には名物レポーターがいる。「は〜い藤田です!」と元気に登場する街角レポーター藤田優一さん。神奈川県内をくまなく歩いてその日の街の暮らしをいきいきと伝える。

「ラジオは、街と生活にフィットしたメディア。この番組のリスナーには仕事で車に乗る人や自営業、専業主婦の方が多くいます。ですから、はじめて一日一日を生活している人に向かって放送をしているという意識がありますね」

そして、北島さんにとって、その意識は横浜をはじめ神奈川の人たちだけに深めている。

## 限ったものではない。

「横浜という都市のブランドイメージがあるせいか、関東の他県にお住まいのリスナーの方も多いんですよ。ですから、横浜のローカル性を大切にしつつ、全国区のバリューがある情報も、バランスよく取り上げたいと考えています」

## 暮らしをスケッチするラジオの魅力

高校生の頃、北島さんは生まれ育つた徳島で、瀬戸内海を越えて届く大阪のラジオに耳を傾け広い世界に夢を馳せていました。だが、今ではずいぶん状況が変わってしまった。

「女性のラジオ離れや、もはやラジオを持つていない若い人もいると耳にします。偶然聞いた時にも、面白いと思ってもらえるよう取り組みたい。

しばらくラジオから遠ざかっていた方々が、たまたま乗ったタクシーで『ザ・ブリーズ』が流れていて、「私の歳でも聴ける番組があった。以来毎日聴くようになつた」と、メッセージを頂いたこともありますから」

聴き手から発信する側となつた今、北島さんは、ことばで日々の街の暮らしをスケッチするラジオの魅力に思いを一層深めている。

# お街が劇場となる大道芸を撮影でシトリに続け、

Photo by Yabe Shiro



もりなおみ  
1948年、栃木県生まれ。武蔵野美術大学卒業後、イタリア国立フィレンツェ美術学校に留学。86年から「野毛大道芸」のアートディレクターを務めた。これまでにカナダやハンガリー、トルコ、アルゼンチン、イタリアなど世界各地の大道芸を取材。著書に『大道芸人』(ビレッジセンター出版局)、『野毛大道芸・森直実写真集』(かなしん出版)などがある。絵画展や写真展も開催多数。写真は、「みなとみらい大道芸会場」。

## 生き生きした客の表情に惹かれた

現在も年に一度、数多くのパフォーマーたちと観客が集う「野毛大道芸」。1986年(昭和61)に始まつたこのフェスティバルは毎回、ジャグリングやパンチマイム、アクロバット、マジック、それに音楽演奏など、さまざまな芸が路上で賑やかに繰り広げられる。その第一回目から写真を撮り続けてきたのが森直実さんだ。

「別に大道芸に興味があつたわけじやなくてね。端的に言うと、お客様の表情に惹かれた。生き生きとした、いい顔ですね。ラッシュ時の改札では誰もが能面みたいに無表情で歩いていて、大道芸を見ている人たちは、みんないい表情で、解放された顔つきなんですよ。そんな表情にはつとしてね」

そもそも人物画を描いていた森さんは、人の一瞬の表情をどうえよう、学生の頃からカメラを手にした。やがて大道芸と出会い、のめり込んでいく。「大道芸の魅力は、客が自分の目で芸を見るという点に尽きる。ほら、日本人って、お墨付きだからとか高名だからといった理由で芸人をどうえて、看板で見ているケースが多いですよ。その点、

## 大道芸は違う。知られざる芸人が無印良品か無印不良品かを見極めるのは、客なんですから。それに、投げ銭をして値付けをするのも客。そのあたりに、大道芸の面白さがある」

### プロでも撮れない写真も撮影できる

そして森さんは、毎回、大道芸の撮影に精力を傾けた。

「プロの写真家でもないので、機材をいろいろと揃えてね。大道芸を撮り始めた頃の写真は、恥ずかしいくらい下下手ですから、見たくもないけど(笑)」

だが、いまや森さんは、「プロのカメラマンでも撮れないショットも撮影できる」と自負する。

「プロは合格点の写真は撮れても、それ以上のものは撮れない。芸の仕掛けやテクニックを把握していないと、撮れないけど、芸人はそこを気にする。それから、火吹きの場合、撮影場所が肝腎。風向きで、ベストなカメラ位置が決まるからね。火吹きは、芸人も風向きをとどめ気にするもの。判断を誤ると危険だから、芸人も撮る方も真剣勝負なんですよ」

## 記録しようと意識したこととは一度もない

20年以上に及んで森さんが撮り続けてきた「野毛大道芸」の写真是、紛れもなく貴重な記録である。このフェスティバルの様子を伝えるのみならず、日本の、そして世界から集つた大道芸人たちが、フィルムに刻まれていてるからだ。しかし、当人はあつけらかんと次のよういう。

「実は、記録をしようと意識したことではない。後に残そうという気すらないほど」

だが、森さんの意志はどうあれ、写真是おののぞと過去を物語り、結果的に記録となるメディアに他ならない。

「写真に記録性はつきものだからね。記録を意識するかしないかを問わず、記録になつてしまふ。それに、撮った時には気づかなかつた価値が、時を経るにしたがい、あらためてわかるからね。たとえば第1回目の86年には、野毛にまだアーケードがあつたことが、当時の写真を見るとわかる。こちらとしてはアーケードを撮るつもりはまつたくなかつたんだけどね。大道芸は、街が劇場となる。だから大道芸を撮つた写真是、街のドキュメントという一面もある。……そろそろ写

真をコンピュータで整理しようかな」▼

# 過街の記憶をデジタルアーカイブして 過去と未来の仲立ちを目指す

Photo by Yabe Shiho



かめのてつや  
1965年、横浜市生まれ。早稲田大学理工学部卒業。東京都下水道局に入所し、同局計画部などに在籍した後、96年より貞昌院副住職。2005年よりSOTO禪インターナショナル事務局長。国境を超えたその活動は09年5月に正力松太郎賞を受賞した。また、横浜市民生児童委員、関東ICT推進NPO連絡協議会講師などその活動範囲は多岐にわたる。  
貞昌院のURL <http://teishoin.net/>

## 寺の情報を発信するウェブサイトの嚆矢

横浜市港南区の高台に位置する貞昌院は、1582年(天正10)に建立され、400年以上もの歴史を誇る。そんな貞昌院には、もうひとつ誇りがある。ウェブサイトだ。まだまだインターネットが普及していなかつた1995年(平成7)に、貞昌院はウェブサイトをいち早く立ち上げ、寺の紹介やお経の解説などを掲載。全国に向けて、貞昌院の情報発信に努めた。自ら作成にあたった副住職の亀野哲也さんは振り返る。

「当時は、『寺』とか『仏教』と検索しあとこで、そうしたホームページはまったく見当たりませんでした。日本で寺のサイトを作ったのは、おそらく貞昌院が第一号でしょう。仏教とインターネットの組み合わせが珍しがられ、雑誌や書籍でよく紹介されました。でも、私にとってその二つは違和感がない。ゲーテンベルグによつて史上初めて印刷された本が聖書であつたように、いつの時代もメディアは布教の仲立ちをしてきましたからね」

ニータウン化で昔の面影が失われた  
目下、亀野さんが積極的に取り組んで

いるのが、写真や資料などを電子化して保存するデジタルアーカイブだ。檀家が所有する写真などを集めて地域の歴史を記録し、未来へ伝えようと自論む。

「写真を残すだけではありません。写真には記憶を呼び覚ます作用があるので、当時を知る人に、たとえば『この川でよく海老を釣つた』といったような思い出話を語つていただき、暮らしの文脈を記録することも重要なんですね」

こうした活動を亀野さんは、港南区内の市民歴史サークルを結ぶ民間組織「歴史協議会」と連携して実施してきた。その一方で、貞昌院では地元の航空写真も定期的に撮影してきた。寺に飾られた写真を見ると、町の変遷が一目瞭然だ。

「このあたりは、高度成長期の頃からニータウン開発が始まり、ベッドタウン化していきました。私自身の思い出を語ると、上永谷駅ができるのが小学校高学年の時。それまでは草葺きの家や牛小屋もある町だったのが、開発で昔の面影が一気に失なわれた。山を削つてニータウン化したため今はもともとの道さえも残っていないし、かつては蛇行していた川がまっすぐになつてしまつた。そうした記憶を記録として残し、過去と未来の仲立ちができれば」と目的を語る。

## 寺は地域のランドマークであり拠点

「記憶を記録に残すには時代にふさわしい方法、保存のあり方があります。今後、技術の進化によって、さらに面白い表現ができるそうで、楽しみですね」

「地域住民のコミュニケーションや文化の拠点となりうるのは、寺と学校だと思います。それに、会社や役所が移転することはあっても、寺はそうそう移転しませんからね。ですから、寺は地域のランドマークという言い方もできます。したがつて、寺が主導して郷土史のデジタルアーカイブを構築し、資料を公開していくことは意義があると思います」

そもそも寺は、過去帳をはじめ、経文、仏像、書画などの文化遺産を後世に伝える役割を担ってきた。つまり、地域の寺には街のアーカイブの担い手という役割もあるというわけだ。デジタル時代ならではの新鮮な発想を感じさせられた。

**写真は街の歴史を雄弁に物語る史料だ**

横浜の歴史に関する史料を収集・保存し、一般に向けて公開する横浜開港資料館。ここは「近代都市横浜の記憶装置」と謳う。1981年（昭和56）にオープンした同館で準備室段階から在籍した斎藤多喜夫さんは、主に写真と絵に携わってきた。だが、もともと写真に関して、それほど興味がなかつたと振り返る。

「写真分野が手薄だった上で、上司から『おまえがやれ』と言われましてね（笑）。わけもわからぬまま調べる日々が続きましたよ」

ところが、やがて斎藤さんは、横浜は写真の宝庫だと気づく。たとえば外国人向けのおみやげ用写真や絵はがきには、名所や街角などが見られ、いわゆる美人ものも豊富にある。横浜を紹介した海外の新聞やグラフ誌も多い。そうしたビジュアル史料を国内外からせつせと収集し、検証を繰り返すにつれ、斎藤さんは写真に傾倒していく。

「目抜き通りならまだしも、『なんどこんなところまで？』と首を傾げたくなるような裏通りを撮った絵はがきもたくさんある。写真是、街の歴史を雄弁に物語る史料なんです」

「文献と比べ、写真は展示映えもしますから重宝するんです」

そして、約30年に及ぶ在職期間中、同館が収集した史料は20万点を越えた。収蔵庫に入りきらず、昨年に退職したものの、今も週に一度、資料館に出かけては

**写真は街の歴史を雄弁に物語る史料だ**

横浜の歴史に関する史料を収集・保存し、一般に向けて公開する横浜開港資料館。ここは「近代都市横浜の記憶装置」と謳う。1981年（昭和56）にオープンした同館で準備室段階から在籍した斎藤多喜夫さんは、主に写真と絵に携わってきた。だが、もともと写真に関して、それほど興味がなかつたと振り返る。

「写真分野が手薄だった上で、上司から『おまえがやれ』と言われましてね（笑）。わけもわからぬまま調べる日々が続きましたよ」

ところが、やがて斎藤さんは、横浜は写真の宝庫だと気づく。たとえば外国人向けのおみやげ用写真や絵はがきには、名所や街角などが見られ、いわゆる美人ものも豊富にある。横浜を紹介した海外の新聞やグラフ誌も多い。そうしたビジュアル史料を国内外からせつせと収集し、検証を繰り返すにつれ、斎藤さんは写真に傾倒していく。

**写真から、横浜の都市形成を読み解く**

斎藤さんは、写真そのものの研究者ではない。あくまで、写真を史料として活用して研究に取り組む、都市形成史が専門分野だ。つまり、写真から何をどう読み解くかが課題なのである。

「かつての写真と地図を重ねると、当時の街並みが再現できます。ですから、横浜という都市がどう形成されてきたかがわかる。また、たとえばパノラマ写真には、撮影者の意図とは関係なく、人があまり目に向かないところまで写っている。よって文献には残らない出来事や都合の悪い事実まで発見できる。こうした意味でも、写真は実に有益なんです」

そして、斎藤さんは収集した写真をもとに、横浜開港資料館で数々の展覧会を実施してきた。同館の第2回目の企画展『下岡蓮杖と横浜写真』（81年9月）をはじめ、多くの鑑賞者たちに横浜の往時を伝えてきたのだ。

「日本人は史料を粗末にしがちだし、史料を残すシステムも整っていません。歴史とは何かというと、語るに値することがある。ところが、何が語るに値するかは、政治家か一般人か立場によつて異なる。それぞれの立場の人々が、後世に伝えるに値する出来事を物語る史料を残す必要がある。そうでないと、出来事そのものが失われてしまします。それから、世の中には間違った言い伝えが数多くある。街角にある碑文にも、事実と異なる内容が書かれたものが少なくない。間違った言い伝えと聞うのも、私の役割のひとつだと思います。今後も聞つていかないと、正しい知識が伝わらない」

斎藤さんの多忙な日々は、これからも

整理に追われていると苦笑する。また、

最近は開港150周年に関連した原稿依頼や講演の要請が絶えず、多忙な日々が続く。

「退職したらゆっくりと過ごすつもりだったのに、忙しくて研究すらできないほどですよ（笑）」

Photo by Yabe Shiro



さいとうたきお  
元横浜開港資料館・横浜都市発展記念館調査研究員。1947年、横浜市生まれ。東京都立大学（現・首都大学東京）大学院修士課程修了。著書に『幕末明治 横浜写真館物語』（吉川弘文館）、『東京横浜今昔 横浜開港150周年』（学習研究社）など多数。現在は國學院大學文学部、フェリス女学院大学オーブン・カレッジ講師も務める。

横浜市中央卸売市場に、「ジャヤストミート」という生ハム販売店がある。この店先に腰をかけて、二人の男性がおしゃべりに花を咲かせていた。どこででも見られるような光景だけれど、よく見ると二人の前にはノートパソコンや小型のビデオカメラが設置されている。実は、ネットTVの生放送中のである。その名は「Y C M B インターネット市場放送局」。毎月第1・第3土曜にライブ映像をウェブ上で無料配信する、実に小規模なテレビ局だ。昨年の秋に開局した。その技術的なサポートを行う橋本康二さんはいう。

「生放送の良さは、反応がダイレクトなところ。この番組を見た近所の人たちがふらりと市場に立ち寄ってくれるんですよ。しかも、来てくれた人に飛び入り出演してもらつたりね。つまり、まさにインターネットタイプで、しかも参加型。ライブ配信は、ネットの良さが活用できるんです。それから、この市場には面白い店がたくさんあるのに、まだまだ知らない人が多すぎる。実際に足を運んで、自分の目で確かめるきっかけになればと願っています」

### 放送を見て訪れた人が飛び入り出演

横浜市中央卸売市場に、「ジャヤストミート」という生ハム販売店がある。この店先に腰をかけて、二人の男性がおしゃべりに花を咲かせていた。どこででも見られるような光景だけれど、よく見ると二人の前にはノートパソコンや小型のビデオカメラが設置されている。実は、ネットTVの生放送中のである。その名は「Y C M B インターネット市場放送局」。毎月第1・第3土曜にライブ映像をウェブ上で無料配信する、実に小規模なテレビ局だ。昨年の秋に開局した。その技術的なサポートを行う橋本康二さんはいう。

「生放送の良さは、反応がダイレクトなところ。この番組を見た近所の人たちがふらりと市場に立ち寄ってくれるんですよ。しかも、来てくれた人に飛び入り出演してもらつたりね。つまり、まさにインターネットタイプで、しかも参加型。ライブ配信は、ネットの良さが活用できるんです。それから、この市場には面白い店がたくさんあるのに、まだまだ知らない人が多すぎる。実際に足を運んで、自分の目で確かめるきっかけになればと願っています」

### 個人でも簡単にテレビ局が始められる

橋本さんがインターネットによる映像配信を手がけるようになったのは、今から12年も前に遡る。1997年（平成9）、橋本さんが蕎麦屋を営んでいた横浜市金沢エリアに、全国で三番目となるCATVインターネットサービスが開始。常時接続で高速通信が可能となつた。そこで橋本さんは「テレビ中継を思いつく。生放送ならではの強みを知ったのは、この時以来だ。

「地元の情報やイベントの動画中継を始めた。とくにお祭りなどは、静止画よりも動画のほうが伝えやすい」やがて、その試みは「横浜市民テレビ」へと発展していく。「市民の市民による市民のためのインターネットテレビ」をモットーに、一般の人たちに向け映像配信のサポートを行う営みである。

「以前に比べると、撮影や編集の機材は安いし、操作も簡単。無料で使える生中継サイトも増えました。今は、100円パソコンで個人がテレビ局が始められる時代なんです」

そんな時代の流れを借りて、最近、橋本さんは、多くの人たちが配信した映像のアーカイブ（収蔵庫）の構築も始めた。

### 「街で起きた些細な出来事も、後々、重要なことがありますからね」

また、より高精細な動画を求め、ハイビジョンにも着手した。

### Y150で市民発ネットテレビを展開

目下、橋本さんは「Y150 横浜市民放送局」に携わっている。これもやはり市民の誰もが番組制作者や出演者になる市民発信のネットTVだ。この7月には開国博にまつわるレポートを本格的に放映を開始する予定だ。

「私の考えるネットTVとは、自分で自分のことを発信できるメディア。自分で動画配信ができるようサポートするのが、私の役割だと考えています。いろんな人を巻き込んで展開していきたい」とはいえ、人々の意識はまだ未成熟。問題を感じていないわけではない。

（動画投稿サイトの）YouTubeを見ててもわかるように、日本人は自分の顔を出さない。本来、自分をさらけ出さないとコミュニケーションは成り立たないはずなのに」と不満も漏らす。

それでも、「いずれ全国の商店街で市民放送が展開される日が来る」と信じて橋本さんは今日も横浜の街を放送機材を担いで駆け回つている。



Photo by Yabe Shiro

はしもどこうじ(左から2人目) 横浜市民テレ主主宰。中学生の頃から8ミリフィルムで撮影を開始。1980年に脱サラして蕎麦打ちの道に入り、90年に横浜市金沢区に「谷津坂屋」を開業。2004年「Windows XP」のある生活コンテスト第3回「ビデオ編集とWindows XP」窓職人大賞を受賞。文中で紹介したネット放送局のURLは次の通り。  
インターネット市場放送局 <http://www.ycmb.tv>

# 開港の夏空ふかく神います ブルーを仰ぎきみと想ひき

水原紫苑  
写真 矢部千鶴

横浜開港百五十年。  
いつまでも新しい町横浜にも  
長い時が流れたのにおどろく。

西洋の人たちがやって来て、  
あの天空には、この世界を創つた  
ただひとりの神がいるのだ  
と聞かされた日本の若者たちは  
何と思つたのだろう。

八百万の神をもつ私たちには  
想像もつかない、あのブルーの中の神。  
だが、ただひとりの神は、  
いつかただひとりの愛するひとに  
重ねられたのではないか。

みずはらしおん 歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に  
師事し、以降歌集「びあんか」「客人(まつうど)」「くわんおん(觀音)」「いろせ」「あかるたへ」、  
著作「世阿弥の夢」「星の肉体」「京都つた物語」などを発表。現代歌人協会賞受賞。懸河梅花  
文学賞、河野愛子賞など多数受賞。  
やべしほ 写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語  
日本文学科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地塾に師事し、独立。  
渡辺貞夫のミュージシャンを多く撮影している。





### ▲プロムジカ女声合唱団

ハンガリーの「プロムジカ女声合唱団」は、指揮者デーネシュ・サボーのもとで合唱を続けたいと「カンティムス少年少女合唱団」の卒業生たちが集まり、1986年に創立されました。現在は80人強のいずれも才能豊かな女性たちで構成されています。

彼女たちの透明感のある美しい響きと完璧なアンサンブルは、ヨーロッパの権威ある五つの国際合唱コンクールの優勝合唱団を集めて行なわれた「ヨーロッパ・グランプリ・コンクール」での優勝、世界中の合唱団が集まる「合唱オリンピック」での2部門優勝など、世界的に著名な合唱コンクールで数多くの受賞をはじめ、過去5回の来日公演でも高く評価されています。

横浜信用金庫では、同合唱団出演による「ジェリービーンズ・コンサート」を7月18日(土)に横浜美術館にて開催します。時間は、15時と16時の2回(各30分)。入場料無料です。

「話をするうちに痛感したのは、レベルの高い合唱チームに参加してもらう必要があるということです。でも、そう簡単に出演を了承してくれるとは限りません。そこまで、メインゲストとしてハンガリーからプロムジカ女声合唱団を招くことにしました」

合唱団は、世界的に権威のある合唱コンクールでたびたび受賞を重ねてきました実績を誇る。

この招聘を決めたのをきっかけに、藤村さんの東奔西走が始まった。世界の各都市に飛び、国内の港町を巡った。「横浜から、そしてアジアから世界に向けて合唱を発信したいと思いました。ですから、ソウルと香港の合唱グループにも参加してもらいました」



## 世界7カ国の青少年が一堂に集う 横浜国際ユース友好交流合唱フェスティバル

♪国内外の各都市から青少年が参加

出演者は総勢、なんと500人を上回る――。

開港150周年を迎える、眼下、横浜では数々のイベントが市内随所で目白押しした。その中でも特筆したい催しのひとつが、7月20日(月)に横浜みなとみらいホール大ホールで行われる「横浜国際ユース友好交流合唱フェスティバル(以下、YYCF)」である。

7月20日といえば「海の日」。開港を祝うには、もってこいの日取りと言える。

YYCFは、7カ国の青少年たちが一堂に集い、合唱を通じて国際交流を行なう音楽の祭典である。

参加国は、1858年(安政5)に江戸幕府が安政5カ国条約を結んだ国(うちからアメリカ、ロシア、オランダの3カ国)。そして横浜をはじめ同条約によって開港した函館、新潟、神戸の高校生6グループ、さらにはハンガリーや韓国、中国(香港)からのゲストも加わり、国際色がきわめて豊かな特大規模のイベントが賑やかに開催されるのだ。

それでも、総出演者が500人

とは、横浜での合唱祭としては前代未聞だろう。

「いえ、おそらく日本でもこの規模は初めてでしょう。しかも、フィナーレでは約500人が一体となって合唱しますからね」

こう語るのは、YYCF実行委員会事務局長を務める藤村隆男さん。会場では、さすがに控室が足りないため出演者は客席で自分たちの出番を待つことになるという。だがそれは、やむなき措置というわけではない。

「他の参加グループの合唱を、互いに鑑賞してほしい。そうすることでいつぞやの、合唱祭の経験は初めて。そこで、藤村さんは、合唱の名門校として名高い神奈川県立弥栄高校合唱部の顧問を務める先生のもとに相談に赴いた。

### ♪ハンガリーから一流合唱団も招聘

YYCFの準備が始まつたのは、2年以上も前に遡る。財團法人国際教育交流馬場財団の専務理事でもある藤村さんは、かねて高校生の国際交流プログラムや若手音楽家を育成するコンサートに携わったキャリアはあつたものの、合唱祭の経験は初めて。そこで藤村さんは、合唱の名門校として名高い神奈川県立弥栄高校合唱部の顧問を務める先生のもとに相談に赴いた。

### ♪書き下ろしのテーマソングも披露

ところでYYCFのフィナーレでは、この日のために書き下ろされた『BEAUTIFUL TOMORROW～出航～』が披露される。作詞は村田さち子さん、作曲は横浜みなとみらいホール館長でもある池辺晋一郎さんが担当したオリジナル・テーマソングだ。

開港以来、アイスクリームや新聞などの、横浜は数々の分野で日本における発祥地となつてたきた。YYCFに足を運べば、青少年たち約500人による合唱という日本で初めての試みに立ち会える。

# 横浜の中小企業の応援団 影山摩子弥さん

横浜市立大学国際総合科学研究院教授



## ● 横浜らしい社会貢献活動

中小企業による社会貢献活動——。こう書き出すと、なんだか堅苦しい話が始まるのではないかと思われる。でも、どうぞ安心を。

さまざまな顔を持つのが横浜の魅力だが、社会貢献に取り組む中小企業に関して、横浜らしい顔つきを覗かせる。横浜市立大学国際総合科学研究院教授の影山摩子弥さんは、CSRつまり企業の社会的責任について研究している。とりわけ、中小企業が対象だ。影山さんが2006年に横浜に限定して現況調査を行ったところ、多くの中小企業が大企業に勝るとも劣らない取り組みをしていることが明らかとなつた。

「横浜に限らず、中小企業は地域に密着しているところが多く、CSRに取り組まない限り倒産しかねません。つまり、消費者へのアピールや公共性を重視する大企業に比べ、中小企業は死活問題としてCSRを行う傾向があります。そして横浜はもともと地域性が強く、街に愛着や誇りを持つた住民も多い。そんな背景もあり、日本の他の都市よりも、CSRに熱心な中小企業が多い。しかも、そのレベルも非常に高いんです」

## ● 環境や福祉に貢献する横浜の中小企業

また、慈善事業ではなく、本業の一環としてCSRに携わる中小企業が多いのも横浜の特徴のひとつだ。その一例として、影山さんは印刷会社のO社をあげる。「かねがね〇社は有機素材のインクを使つた印刷に力を注いでいますが、そのインクは乾きにくいため高い技術力を要します。だからこの営みは環境に貢献するとともに、技術力の向上や特化にもつながる。また、〇社はNPO（非営利活動団体）と協力し、色覚障害を持つ方にとつて見えやすい色づかいについて検討を行つたところ、多くの中小企業が大企業に勝るとも劣らない取り組みをしていることが明らかとなつた。

「横浜に限らず、中小企業は地域に密着しているところが多く、CSRに取り組まない限り倒産しかねません。つまり、消費者へのアピールや公共性を重視する大企業に比べ、中小企業は死活問題としてCSRを行う傾向があります。そして横浜はもともと地域性が強く、街に愛着や誇りを持つた住民も多い。そんな背景もあり、日本の他の都市よりも、CSRに熱心な中小企業が多い。しかも、そのレベルも非常に高いんです」

## ● CSRの調査を学生の教育にも活かす

大手企業にはCSRの専門部署があり、予算も豊富なところが多いが、中小企業は恵まれていない。そこで、中小企業のCSRをサポートする必要があると考えた影山さんは、2006年に大学発ベンチャーとして、「横浜市立大学CSRセンター」として、「横浜市立大学CSRセンター」とともに、技術力の向上や特化を行つたところ、多くの中小企業が大企業に勝るとも劣らない取り組みをしていることが明らかとなつた。

この組織は学生教育にも活かされている。影山さんのゼミを中心とした学生たちが、さまざまな企業を訪れ、CSRの担当者にインタビューを行う。そして、この組織は学生教育にも活かされています。このように、中小企業にとってCSRは営業手段という面もあります。ただし、これは悪いことではない。利益に結びつかないと、持続性が失われてしまいますからね」

さらに横浜のCSRの特色として、自治体による支援体制が挙げられる。横浜市には、助成金をはじめ企業の地域CSR事業をバックアップする数々の制度が整っているのだ。

「その充実ぶりは、横浜市が日本で唯一といえますね」

かけやままこや  
1959年静岡県生まれ。静岡県立浜名高等学校卒業後、早稲田大学商学部、早稲田大学大学院商学研究科に進学。1989年、大学院修了とともに、横浜市立大学商学部経済学科に専任講師として奉職し、1990年同大助教授を経て、2001年より教授。2005年の独立行政法人化後、国際総合科学研究院にて教授。2006年、横浜市立大学CSRセンターLLPセンター長に就任。6月中旬に「地域CSRが日本を救うー地域を愛し地域に愛される企業をめざしてー」(敬文堂)を出版予定。

# 画期的な技と斬新な芸を見せる、ジャグリング界のスター

**KAZUHOさん**  
ジャグラー



## ●マジックやベリーダンスとの共演も

世界中の一流パフォーマーたちが芸を競い合う「ヨコハマ大道芸」。春の風物詩とも呼べるこのフェスティバルの常連出演者のひとりが、KAZUHOさんだ。天才ジャグラーとの呼び声も高いパフォーマーである。

「横浜のお客さんは、温かい印象がありますね。たとえば、絶妙のタイミングで拍手や歓声がきたり、ぼくの技がきちんと伝わっているんだと実感できます。それに、横浜ではジャグリングに触れる機会も多いから、お客様の目も肥えています。だからこそ、新しいスタイルに挑戦したい」

そこでKAZUHOさんは、これまで「ヨコハマ大道芸」でマジシャンやベリーダンサーと共に演してきた。ちなみに、ベリーダンサーと一緒に演んだ時には、9拍子のリズムに合わせて、宙に舞うピонを鮮やかに操った。

「異ジャンルの人とのコラボレーションは、視点も幅も広がるのが魅力。ソロでもアイデアが狭まっていますからね。これからも、新しいジャグリングの形を考え、さまざまに展開していくたい」

## ●ストリートではなくステージが出発点

横浜のジャグリング・ファンが恵まれているのは、大道芸スタイルのKAZUHOさんが見られることだ。

「ジャグラーだと自己紹介すると、『大道芸をしているんですね』とよく言われますが、それは誤解です。僕が大道芸スタイルを見せるのは、横浜だけ。というのも、路上で芸をするのが単純に苦手で。歩行者の足を止めたり、客とやりとりする技が、僕にはないんですよ（笑）」

日本では大半のジャグラーの出発点はストリートだが、KAZUHOさんは事情が異なる。10歳でスペインに留学し、サークัส団でジャグリングと出会った。

「一目見てかっこいいと思い、習い始めました。でも、うまくいかなくて。ベテランの技を見て、やり方はわかるんですけど、いざやってみると思うように体が動かない。ひたすら反復しました」

やがて、KAZUHOさんはサークัส団の公演に同行し、パレードでジャグリングを披露するようになる。つまり、KAZUHOさんの原点は、路上ではなくステージにあるのだ。

「14歳で帰国して、ある時、公園でジャグリングの練習していたところ、声をかけられて仕事が舞い込んできただんです。なつたのは、その頃からですね」

## ●パフォーマーにして、演出家でもある

その後、KAZUHOさんはステージショーとしてのジャグリング・スタイルを模索。東京ディズニーランドでレギュラー出演するなど経験を重ね、次第に自分ならではの見せ方を築いていった。また、画期的な技にも取り組んだ。たとえばピアノをボールで演奏するといった大胆な芸を身につけた。そして、現在のスタイルを確立したのだ。

「演技中は、一言もしやべりません。音楽を重要視していますから。僕はパフォーマーと同時に、演出家だと思っていました。最近は、新しい技よりも、演出を考える機会が増えましたね。曲先行で演出をするので、ミュージック・ビデオが参考になります。10代の頃からマイケル・ジャクソンが大好きなんですよ」

このところ、KAZUHOさんは横浜での仕事が増えた。スケジュールの半分近くが、横浜でのショーだという。イベントや結婚披露宴などでショーを見た人が呼んでくれるからだ。横浜はまた一人新しい才能を取り込んだようだ。▼



▲中央 KAZUHOさん(P.20で紹介) 写真提供 森直実さん(P.6で紹介)



**DVD『横濱を旅する：昭和のはじめ』発売中**

横浜開港150周年を記念して制作されたDVD「横濱を旅する：昭和のはじめ」が歴史探訪社より好評発売中（1800円）。1959年の開港から、ちょうど中間点すなわち開港75年当時の大馬路さんのナレーションで紹介しています。お申込みは、歴史探訪社ホームページ(<http://www.rekishitanbou.com/>)より。

## 横浜ルネサンス No.13

2009年5月31日発行  
発行 横浜信用金庫  
〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1  
Tel:045-651-1451(代) Fax:045-651-2303  
<http://www.yokoshin.co.jp>

横浜信用金庫総合企画部  
(横浜ジェリーピーンズ倶楽部)  
<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>  
E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp  
PortSide Station Co., Ltd.

制作・デザイン 横浜信用金庫 Printed in Japan 本誌記事の無断転載・複写を禁じます  
本誌に関するお問い合わせは、横浜信用金庫総合企画部:045-651-1451(代)まで



横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを実践する「横浜ジェリーピーンズ倶楽部」事業を展開しています。同倶楽部は、「横浜の価値を高める各種の活動」を行うことを目的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業になっています。これまでに、横浜赤レンガ倉庫で音楽と大道芸のコラボレーションイベントを開催しました。出演者はN・U・CHURUCHURUW、マイクロニクルの3バンドと「ヨコハマ大道芸」のKAZUHOさん(ジャグリング)とunipaさん(ロービング)です。バンドの演奏に合わせて、KAZUHOさんが7個のボールのジャグリングを成功させたと、250名を集め会場の盛り上がりは最高潮に達しました。

横浜開港150周年記念イベントとして、2009年1月3日に横浜赤レンガ倉庫で音楽と大道芸のコラボレーションイベントを開催しました。出演者はN・U・CHURUCHURUW、マイクロニクルの3バンドと「ヨコハマ大道芸」のKAZUHOさん(ジャグリング)とunipaさん(ロービング)です。バンドの演奏に合わせて、KAZUHOさんが7個のボールのジャグリングを成功させたと、250名を集め会場の盛り上がりは最高潮に達しました。

2009年3月14日に横浜港大さん橋で、集客ギャンベーン「横濱三塔物語」(主催:横濱三塔物語実行委員会)のイベントのひとつとしてコロナートを開催しました。当日は、「横濱三塔スタンプラリー」の参加者や「飛鳥II」の乗船客など多くの人々でぎわう中、ポップ・バンドのN・U・Caprock、leaf of reason、YKJ、千佐都が約3時間のライブを行いました。



横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリーピーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。

## How To Taste Musics In Yokohama.

### 横浜の聴き方

第6回

### 「本牧メルヘン」 鹿内孝

初めてこの曲を聴いた時、すぐに五木寛之の「海を見ていたジョニー」という短編を思い浮かべた。ベトナム戦争帰りの黒人兵ジョニーが、戦争で殺人を犯した自分(ピアニスト)にはジャズが弾けないと苦悩する話である。直感的には歌詞に出てくる「ジョニー」という人名からの連想なのだが、『本牧メルヘン』の「ベットのブルースに送られて」というフレーズが示すジャズ観が、「海を見ていたジョニー」と通底しているのである。両作品が想定しているのは、4ビートのジャズだと思う。

「海を見ていたジョニー」は、1967年に出版された同題の短編集に収録された。同時期に音楽評論家・相倉久人の「ジャズは状況に追い越された」という名言がある。ポップミュージックとしてのジャズの存在感の低下を表現したものだが、『本牧メルヘン』と『海を見ていたジョニー』と共に通しているのは、状況に追い越されたジャズを愛する保守性である。平岡正明の「横浜ジャズは後向きでいいのだ」(『ハマ野毛』創刊号)という言葉もこの保守性を裏付けている。「古くて新しい街」といわれる横浜の「古い」部分の象徴といえるかもしれない。

これまで取り上げてきた曲に比べて、「本牧メル

ヘン」はややマイナーな存在である。作詞が阿久悠、作曲はブルー・コメッツの井上忠夫(後に大輔)で鹿内孝が歌った1972年の曲である。「本牧で死んだ娘は鷗になつたよ」と、いきなり地名から始まる「伊勢佐木町ブルース」は歌い出しに「あなた知つることを一切語つていない」。本牧には戦後から1980年代前半まで米軍の接收地が存在し、軍施設や軍人用の住宅があった。フェンスに囲われたそこは日本人の立ち入りが禁止されていた。本牧は日本人社会と「アメリカ」が共存する特異な空間で、元町と本牧をつなぐ麦田のトンネルは「異界」との出入りだった。浜つ子以外の人に本牧という街のこの独特なたたずまいがどれほどわかるだろうか(例え「北千住」という地名に含まれるローカルなニュアンスは、普通の外国人には容易に理解できないうだろう)。阿久悠は自らのブログで、この曲について「無国籍」な雰囲気を求めてたと述べている。その舞台として本牧は最適だったといえる。(中島久)

▼ 注 ベット=トランペット



本編とともに、当コラムで過去に取り上げた「ブルー・ライト・ヨコハマ」「伊勢佐木町ブルース」の記事を、当金庫のHP(横浜ジェリーピーンズ倶楽部)<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>で読むことができます。



横浜開港 150 周年記念イベント

# PRO MUSICA GIRLS CHOIR JELLY BEANS CONCERT



# 横浜美術館

グランドギャラリー

入場  
無料

プロムジカ女声合唱団 ジェリービーンズコンサート

# 2009年7月18日(土)

①15:00～ / ②16:00～ (各30分)

主催 横浜信用金庫 横浜ジェリービーンズ倶楽部

